# 子どもの発達保障と遊び

## 特集にあたって

川地亜弥子

本誌はこのたび，人間らしい生活を営むうえで必要不可欠であり独自の文化をもつことに着目して，「遊び」「食」「集団」のそれぞれについて子どもの発達と現代の課題との関連で考察することを目的とする一連の特集を企画している．

格差の拡大と分断が進む現代日本社会においてこの3つは貧困化の危機にあるが，生活のベースとして自明視されたり，子どもの自発性や主体性の重視という方針のもとに意図的な「指導」が避けられたりする傾向が少なからずある．他方，子どもの生活におけるこれらの重要性を認識するがゆえに，大人にとって都合よく「管理」するための（本来の「指導」とは言えない）意図的な働きかけが子どもの人格発達に負の作用をもたらしている現状もある．そうした教育的意図に敏感で意見表明が難しい子どもたちの場合はとくに，そうした作用が行動上の「問題」というかたちで現れやすく悪循環に陥りやすいと考えられる．

そこで，今あらためて，「遊び」「食」「集団」について，発達的根拠を示しつつ子どもたちに保障したい教育的発達の源泉のあり方を考えたい．

今号ではその第一弾として，「子どもの発達保障と遊び」をテーマとし，周りの人と共に自らの生きる世界を生み出し，夢中になって楽しむ遊びのよさを味わうことができる論考をお寄せいただいた．

服部敬子は，子どもの遊びについて，子どもの権利宣言で明確に権利として位置付けられた一方，現代の日本におけるその権利保障の不十分さを指摘している．「それしかない」「しかたない」から「遊んで」いる状況を脱し，安心して楽しく遊ぶ権利を保障するための方策を提起している．

瀬野由衣は，2～3歳児の遊びから，その表象世界に迫っている．子どもたちが融けこむ表象世界が，日常生活の文脈で生まれ（生み出され）ていることの重要性を指摘している．

富田昌平は，鬼や河童などの架空の存在を本当にいると信じてやりとりを楽しむ想像的探険遊びに注目し，人間発達にとっての意味に加え，不寛容な時代における重要性について言及している．

田中浩司は，遊びを通した学びについて所属感の観点から分析している．「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」にも言及しながら，集団遊びで形成される所属感と協同性の関係を考察している．

3つの実践報告では，指導者や子ども同士の信頼関係，集団の中でのやりとり，遊びがふくらんで展開していく様子が生き生きと描かれている．

市原こころは，2歳児クラスの子どもたちが，どのように大好きなごみ収集車の世界で遊びを広げ，仲間関係を深めたのかを描いた．浦嶋真由美は，小学部の実践から「遊びの指導」における子どもの主体性，教師の指導のあり方について鋭く提起している．小川諒裕は，放課後等デイサービスでの，大人から周りの仲間へと関係が広がり遊びが展開した実践を報告している．同時期に表れた問題行動への関わりとその考察も示唆深い．

遊びの「純粋にそこから得られる楽しみと喜び」（服部論考）を，すべての人が享受することを保障するための理論的・実践的提起として，本誌が活用されることを願っている．（かわじ　あやこ）